

## 4 歳児の家庭における絵本体験の特徴

－ 幼稚園での絵本体験の影響をふまえての分析－

横山真貴子

(奈良教育大学幼児教育教室)

上野由利子・木村公美・原田真智子

(奈良教育大学附属幼稚園)

### 4-year-old Children's Picture-book Experiences at Home.

Makiko YOKOYAMA

(Department of Early Childhood Education, Nara University of Education)

Yuriko UENO・Kumi KIMURA・Machiko HARADA

(Kindergarten attached to Nara University of Education)

**要旨：**本研究の目的は、家庭での絵本体験をふまえた保育実践を行うために、園児の家庭での絵本とのかかわりを明らかにすることである。そのため研究1では、4歳児の母親40人を対象に質問紙調査を行い、「子どもの絵本好意度」「読み聞かせ頻度」「保育年数」「母親の読書活動」の4点から園児の家庭での絵本体験を明らかにした。研究2では、3年保育児の母親15人に同一の質問紙調査を3歳と4歳時点の2回行い、3～4歳にかけての家庭での絵本体験の変化を検討した。2つの研究の主な結果は、以下の4点にまとめられる。①園での絵本体験が、家庭で読む絵本に大きく影響していた。家庭で読む絵本は、園を介したものが多くなっていた。②母親が期待する園での絵本とのかかわりは、多様で友だちの存在を生かした物語体験であった。③子どもの絵本好意度が高く、読み聞かせ頻度が高いほど、また母親の読書活動が盛んなほど、園児の家庭での絵本とのかかわりも頻繁かつ活発であった。④3, 4歳の縦断比較では、子どもの絵本好意度は変化しないものの、絵本とふれあう機会や時間は減少していた。絵本の楽しみ方は、4歳になるとより物語の筋の展開に重点がおかれていた。

**キーワード：**絵本 picture-books, 幼稚園 preschool, 4歳児 4-year-old children, 質問紙 questionnaire technique

### 1. 問題

子どもと絵本の出会いの場が、今、大きく広がっている。家庭はもちろんのこと、保育所や幼稚園といった保育機関をはじめ、図書館や書店においても、定期的な読み聞かせ会など、絵本をめぐる催しが行われている。また、子どもと絵本をつなぐ役割を担う大人も、保育者や図書館司書、書店員といった子どもや本の専門家だけではなく、保護者ボランティアなど、多様な人がかかわるようになった(秋田・黒木(編)2006)。

こうした背景には、2000年の「子ども読書年」以来の読書環境の整備に向けた大きな流れがある。特に2005年7月には「文字・活字文化振興法」が制定され、各自治体は読書環境の整備の具現化を求められた。

これを受けて、例えば奈良市は、平成19年度からおむね5年間を計画期間とした「子ども読書活動推進

計画」を策定し、発表している(「奈良しみんだより」2006年12月(No.1033), pp.3-5)。そこでは、「いつでも、どこでも、だれもが読書できる環境」を整えていくことを目標に、「学校・幼稚園・保育園」「市立図書館」「地域・ボランティア」が連携・協力しながら、「家庭・子ども」を支援・協力していくことが目指されている。その中で「幼稚園・保育園」では、「乳幼児の多様な興味関心に対応できる読書活動の推進」「絵本が読みたくなる環境作り」「絵本の貸出による親子のふれあい促進」「保育者の研修」の4点が計画として挙げられている。

「いつでも、どこでも」、子どもが絵本と出会う機会を提供することが目指されているわけだが、子どもにとって絵本との出会いの場所が違えば、その内容も意義も異なるであろう。家庭ならば家庭の、保育機関なら保育機関ならではの絵本との出会いがあるはずで

ある。それゆえ、各場所で同質・均一の絵本体験を提供するのではなく、個々の場の特徴を生かした絵本体験を提供することが必要である。また、そうすることによってはじめて、各機関の連携、協力も意味を持つのではなかろうか。

子どもと絵本の出会いが強く推進され、その出会いの場が広がっている今だからこそ、子どもを中心に据え、それぞれの出会いの場の意義について考えていく必要がある。保育現場においては、幼稚園／保育所ならではの絵本との出会いの意義を明らかにし、絵本とかわる実践をいかに展開していくのか、具体的な保育実践の内容や保育カリキュラムを構築していくことが要求されるのである。

保育現場における絵本体験には、保育者に絵本を読んでもらうという読み聞かせ体験の他にも、奈良市の「子ども読書活動推進計画」に「絵本が読みたくなる環境」とあるように、保育室内に置かれた絵本を子ども自らが手にして読む体験や、「絵本の貸出」、あるいは月決めの持ち帰り絵本など、家庭で読む絵本を紹介してもらった体験も含まれる。これらの体験をいかに日常の保育のなかに実践として組み込んでいくかが、今、保育現場に問われているのである。

しかし、こうした園での絵本実践を検討する前に、まずは子どもが最初に絵本と出会う場である家庭での絵本体験の実態を明らかにしていく必要がある。そこで本研究では、園での絵本実践を検討するための第一歩として、園児の家庭での絵本との関わりを明らかにすることを目的とする。研究方法は、家庭での絵本体験を規定する要因を模索するために、一度に多数の要因の情報を収集できる質問紙調査を用いる。質問紙の項目には、園の絵本体験との関連も加味する。その際、園での絵本体験、すなわち保育経験の有無による比較が可能となるように、3年保育を実施している幼稚園の4歳児を対象とする。絵本体験を規定する要因としては、保育経験の有無、すなわち「保育年数」に加えて、先行研究から次の3点が考えられる。「子どもの絵本好意度」及び「読み聞かせ頻度」(横山, 2006)、「読書モデル」としての「母親の読書活動」(秋田・無藤, 1996)である。本研究では、この4点から絵本体験を問う質問紙を作成し、3歳と4歳の同一時期に同一の調査を行うことで、入園直後から4歳進級後の家庭での絵本体験の変化を明らかにする。

## 2. 研究1：4歳児の家庭での絵本体験の特徴

### 2. 1. 目的

幼稚園ならではの絵本実践のあり方を探るために、園での絵本体験の影響を加味した質問紙調査を行い、4歳児の家庭での絵本体験の実態を明らかにする。

## 2. 2. 方法

### 2. 2. 1. 調査協力者と手続き

N県内の3年保育を実施しているN幼稚園4歳児2クラス(各クラス29人、男児27人、女児31人)の母親58人。質問紙は、研究目的を説明した後、直接母親に配布し、園内に留め置き法で回収した。回収数は40(子どもの性別：男児23人、女児17人)、回収率は70.0%。母親の平均年齢は36.0歳(レンジ28~43, SD3.38)。調査時期は2004年7月中旬である。

### 2. 2. 2. 質問紙の構成

4歳児の家庭での絵本体験を明らかにするために、以下の6点について尋ねた。

①読み聞かせ行動 読み聞かせの実施状況について、以下の8項目を尋ねた。(a)読み聞かせ開始時期(11択)、(b)読み聞かせ頻度(5件法：毎日~したことはある)、(c)1日の実施時間(5件法：5分未満~1時間以上)、(d)前日の具体的な読み聞かせ時間、(e)読み手(6択：複数選択可)、(f)きっかけ(4択)、(g)時間帯(8択：複数選択可)、(h)読む姿勢(7択：複数選択可)。

②絵本 家庭で読む絵本に関して、以下の7項目について尋ねた。(a)子どもの絵本好意度(5件法：とても好き~まったく好きではない)、(b)絵本数(8件法)、(c)絵本の種類(17択：複数選択可)、(d)入手方法(8択：複数選択可)、(e)選択方法(11択：複数選択可)、(f)図書館の利用頻度(7件法)。(g)お気に入りの絵本(自由記述)。

③読み聞かせ中の反応 絵本を親子で読んでいる最中の行動を尋ねた。(a)母親の読み方：13項目(5件法：とてもそうである~まったくそうではない)、(b)子どもの反応：14項目(5件法)、(c)子どもの絵本の楽しみ方(8択)。

④ひとり読み 絵本を読み聞かせてもらうだけではなく、子どもが自発的に1人で絵本を読む行動についても2項目尋ねた。(a)頻度(5件法：毎日~まったくない)、(b)1日の実施時間(5件法：見ていない~1時間以上)。

⑤入園／進級後の変化 家庭と保育場面での絵本体験との関連をみるために、以下の5項目について問うた。(a)園で読んでもらった絵本についての会話(2択：ある、ない)、(b)絵本をみる回数(量)(3択：増えた、変わらない、減った)、(c)絵本の種類(3択：増えた、変わった、変わらない)、(d)園での絵本の読み聞かせ、あるいは変化についての具体的なエピソード(自由記述)、(e)園での絵本のかかわりに対する要望(自由記述)。

⑥母親の読書行動 子どもにとって家庭での読書(絵本を読む行為)のモデルは親である。そこで母親自身の読書行動について次の2項目を尋ねた。(a)読書好意度(5件法)、(b)読書頻度(5件法)。

2. 2. 3. 分析

まず、4 歳児の家庭での絵本体験の実態と特徴を描き出すため、全体的な分析を行い、考察を加えた。その後、4 歳児の絵本体験がどのような要因によって規定されるのかを検討するために、「子どもの絵本の好意度」「読み聞かせ頻度」「保育年数」「母親の読書活動（読書好意度・読書頻度）」の4点に関して、評定値による群分けを行い、上記①～⑤の各項目を従属変数として、群差の検定を行った。

2. 3. 結果と考察

2. 3. 1. 全体的な結果

①読み聞かせ行動 (a) 読み聞かせの開始時期 (Figure 1) : 1 歳までに全体の7割 (28人) が含まれ、対象児の大半が乳児期から絵本と接していることがわかる。

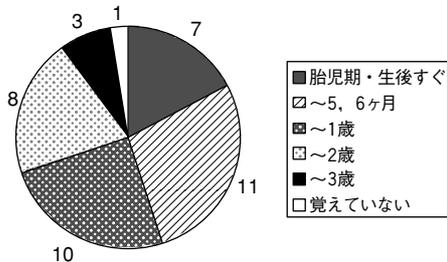


Figure 1 読み聞かせ開始時期

注) グラフ中の数値は、人数を示す (以下、同様)。

(b) 読み聞かせの頻度 (Figure 2) : 1 週間にどの程度の頻度で絵本を読んでいるかを尋ねた結果、「週に2,3回」が12人 (30.0%) と最も多く、「毎日」が11人 (27.5%) と続いた。「毎日」「ほぼ毎日」を併せるとほぼ半数 (19人, 47.5%) を占める。一方、「週に1回」「したことがある」というように、あまり読み聞かせを行っていないと答えた母親も9人 (22.5%) いた。「毎日読むことが定着している家庭」と「読んだり読まなかったりする家庭」「ほとんど読まない家庭」に3分されている。

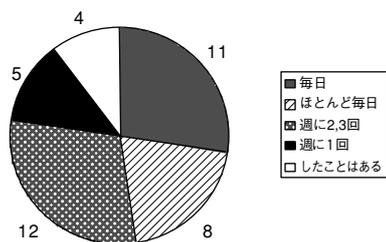


Figure 2 読み聞かせ頻度

(c) 1 日の実施時間 (Figure 3) : 「5-15分」が17人 (42.5%)、「15-30分」が16人 (40.0%) だった。

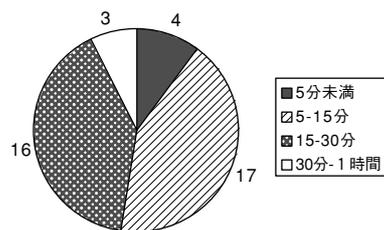


Figure 3 読み聞かせの実施時間

5~30分の間に全体の8割以上が含まれる。この時間量は、1~3冊程度の絵本を読む時間と考えられる。「頻度」にはばらつきが見られたが、「時間」には見られなかったことから、一度絵本を手にとると、どの家庭でも同程度の量の絵本を読んでいると考えられる。(d) 前日の具体的な読み聞かせ時間: 調査用紙記入の前日の読み聞かせ時間の記入を求めた結果、37人の記入があり、平均は21.2分 (SD2.77) だった。(e) 読み手 (複数回答可) : 「母親」が最も多く38人 (95.0%) だった。ただし「父親」も20人 (50.0%) と過半数を占めた。(f) 読み聞かせを始めるきっかけ: 「子どもに頼まれて」が27人 (67.5%) と最も多く、次いで「いつも習慣となっている」が9人 (22.5%) だった。(g) 読み聞かせの時間帯 (複数回答可) : 「就寝前」が32人 (80.0%) と最も多く、次いで「幼稚園から帰ってきて日中」が18人 (45.0%) だった。(h) 絵本を読む姿勢: 「ソファや畳に並んで座って」24人 (60.0%) と「布団に入って」23人 (57.5%) の2項目が過半数を超えていた。

「きっかけ」「時間帯」「姿勢」の結果を併せて考えると、就寝前に布団に入って絵本を読むことが習慣として定着していることが伺える。夜寝る前のひとときが、親子が絵本を読みあう時間として、最も取り組みやすい時間帯であるようだ。

②絵本 (a) 子どもの絵本の好意度: 「とても好き」24人 (60.0%)、「好き」15人 (37.5%)、「好きでも嫌いでもない」1人 (2.5%) であった。全体的に好意度が高いことが指摘できる。

(b) 絵本数 (Figure 4) : 「31~50冊」が14人 (35.0%) と最も多く、「51~99冊」が13人 (32.5%) と続く。31~99冊の間に全体の7割近くが含まれることになる。

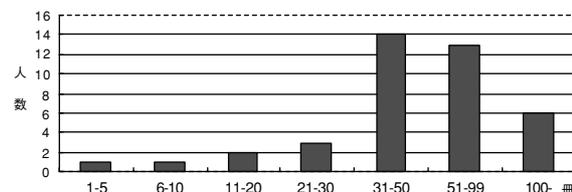


Figure 4 絵本数

(c) 読む絵本の種類（複数回答可）：16種類の絵本の内、最も多いのは園で毎月購入している「おはなしチャイルド」（チャイルドブック）34人（85.0%）だった。次いで「昔話やおとぎ話」28人（70.0%）、「ファンタジー絵本」23人（57.5%）が続いた。

(d) 絵本の入手方法（複数回答可）：幼稚園の「『絵本の部屋』で借りる」38人（95.0%）が最も多かった。次に「月決めて幼稚園から」31人（77.5%）が続いた。一方、「親が買う」は29人（72.5%）だった。「絵本の種類」の結果と併せて、園を通して絵本を手にし、読んでいる家庭が多いことがわかる。

(e) 絵本の選択方法（複数回答可）：「その場で見て、親がおもしろそうだった本を選ぶ」34人（85.0%）、「店先、図書館で子どもが選んだ本を選ぶ」30人（75.0%）、「子どもが普段から欲しいと欲していた本を選ぶ」20人（50.0%）が過半数を超えていた。母親の多くが、実際に絵本を手にとって選んでいることがわかる。

(f) 図書館の利用頻度（Figure 5）：「1ヶ月に1回」が最も多く10人（25.0%）、次いで「2週間に1回」が9人（22.5%）だった。1ヶ月に1回以上の利用者が全体の約半数を占めている。一方「1度はある」「全くない」と答えた人は併せて12人（30.0%）おり、利用している人としていない人がはっきり2分される結果となった。

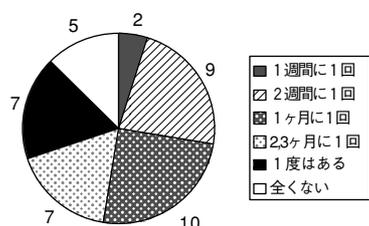


Figure 5 図書館の利用頻度

(g) お気に入りの絵本：40人中、記入が見られたのは31人（77.5%）だった。記入された絵本（シリーズも含む）はのべ90種類、記入の平均は3.5冊（SD2.03、レンジ1-11）だった。最も多かったのは「バムとケロシリーズ」（島田ゆか作・絵、文溪堂）で7人、次いで「ノンタンシリーズ」（キヨノサチコ作・絵、偕成社）5人、「ディズニー絵本」5人だった。回答には、絵本名だけではなく、シリーズ名や特定の作者の作品を記入した者が16人（40.0%）いた。4歳のこの時期、お気に入りの主人公（登場人物）や作家ができ、特定の1冊というのではなく、シリーズや同一作家の絵本を読み進めていることが伺える。

③読み聞かせ中の反応 (a) 母親の読み方（Table 1）：13項目中、評定値の平均が3（「どちらかといえばそうである」）以上の、全体としてよく行われていると

考えられる項目は、「劇のようにして読む」「いろいろな本を読む」「会話しながら読む」「絵本の言葉を忠実に読む」の4項目だった。絵本の言葉を大切にしながら、子どもに内容をわかりやすく伝えるために、母親が声を変えながら読んでいた様子が見える。また、一方的に読むのではなく、子どもとの対話も楽しんでいる点も指摘できる。

Table 1 母親の読み方

質問項目	平均	標準偏差
9 登場人物によって声を変えて、劇のようにして読んでいる	3.60	0.17
2 できるだけいろいろな本を読むようにしている	3.55	0.12
4 子どもと絵本を通して会話しながら読むようにしている	3.53	0.12
3 絵本の言葉に忠実に読むようにしている	3.40	0.17
7 絵本の中に描かれている物について説明を加えている	2.83	0.14
13 子どもが読んで欲しいという限り、何冊でも何冊でも読む	2.63	0.14
1 同じ本を何度も繰り返し読むようにしている	2.53	0.15
6 本に出てくる物の名前を教えながら読んでいる	2.50	0.15
12 絵本の中の出来事と似た子どもの生活経験を思い出して話す	2.33	0.15
11 子どもが読めるところは、子どもに読ませながらよんでいる	2.28	0.20
10 親が手振り、身振りをつけて読んでいる	2.23	0.15
8 読んでいる間や読後に内容について質問し、分かったかどうかを確かめるようにしている	2.08	0.16
5 字を教えながら読んでいる	1.95	0.17

(b) 子どもの反応（Table 2）：平均3以上は「静かに黙って聞いている」「分からないことを質問する」「内容に関連したことを話す」「同じ本を読んで欲しい」「感想を言う」の5項目だった。子どもたちは、静かに絵本を読んでもらうのを聞きながらも、言語による活発な参加をしている様子が見える。

Table 2 子どもの反応

質問項目	平均	標準偏差
5 静かに黙って聞いている	4.08	0.16
7 分からないことを質問する	3.48	0.14
6 本に書かれている内容やそれに関連したことを話したりする	3.40	0.16
14 同じ絵本を何度も読んでほしいがる	3.38	0.19
8 感想を言ったりする	3.05	0.17
2 絵本の中の絵を子どもが指さす	3.03	0.15
3 絵本の中の登場人物と同じ身振りをする	2.48	0.17
9 親の読んでいる話を先取りして、続きを言ったりする	2.38	0.19
1 親が読む絵本の言葉を繰り返して言うとする	2.35	0.17
12 読み終わる前に、次のページをめくろうとする	1.90	0.17
13 同じページだけを何度も見たがる	1.75	0.13
4 気が散ってあまり落ち着いて聞いている	1.60	0.11
10 聞いているうちに、寝てしまう	1.58	0.12
11 絵本を1冊読み終わるまで、集中が続かない	1.53	0.13

(c) 子どもの絵本の楽しみ方：最も多かったのは「話の筋の展開を楽しんでいるようだ」が15人（37.5%）、次いで「言葉やせりふをおもしろがっているようだ」が12人（30.0%）だった。4歳のこの時期になると、子どもは、「絵」（2人、5.0%）よりも「言葉」に興味を持ち、さらに1つ1つの「言葉」だけではなく、お話全体を捉えて絵本を楽しんでいるといえよう。

④ひとり読み (a) 頻度（Figure 6）：「毎日」が13人（32.5%）と最も多く、「週に2,3回」が12人（30.0%）と続いた。「毎日」「ほぼ毎日」を併せると23人（57.5%）と過半数を占める。しかし「めったにない」

も 5 人 (12.5%) おり、個人差が大きいことが指摘される。

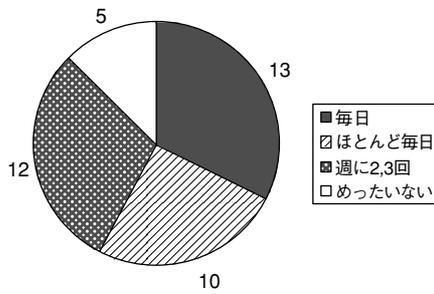


Figure 6 ひとり読みの頻度

(b) 時間 (Figure 7) : 1日にひとりで絵本を読む時間は、「10-15分」が26人 (65.0%)と最も多かった。これは、絵本を2, 3冊読む時間である。

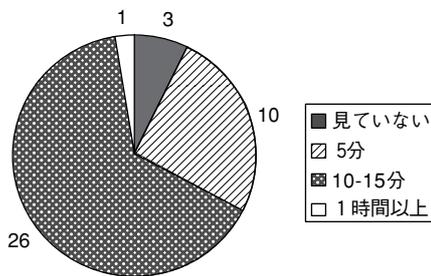


Figure 7 ひとり読みの時間

⑤入園・進級後の変化 (a) 園での絵本に関する会話: 「ある」が30人 (75.0%) だった。大半の子どもが、園での絵本体験について家庭で話していることがわかる。具体的なエピソードとして「季節にあった本を読んでもらったのか、たまに『カエルの本』だった」とか言って、家に帰ってもカエルがのった本をさがして来たりしている。」(母親の記述をそのまま引用、以下同様) や「図書館・本屋さん・絵本のへやなど、本がたくさんあるところに行くと、「コレ、先生がよんでくれた!」とみつけてきて、必ずかりています。」などの記述が見られた。

(b) 読み聞かせの量: 「変化なし」21人 (52.5%) が最も多かった。「増加」は14人 (35.0%)、「減少」5人 (12.5%) だった。

(c) 絵本の種類: 「変化なし」16人 (40.0%) が最も多く、「増加」15人 (37.5%)、「変化した」8人 (20.0%) だった。

⑤のここまでの結果から、園での絵本体験の会話はあるものの、入園／進級後の絵本をめぐる家庭での体験は、大きく変化していないと母親が認識していることが指摘できる。

(e) 園での絵本のかかわりに対する要望 (Table 3) : 記入が見られたのは19人 (48.7%) だった。最

も多い内容は「エプロンシアター・紙芝居やペープサートなど、家でなかなか出来ない事を同じ絵本でも又違うと思うのでお願いしたい。」というように家庭でできない物語体験の要望だった (5人)。次いで「家では絵本の種類が子供の好みに偏りがちなので、いろいろな本にふれる機会を作ってやってほしい。」というように、いろいろな種類の絵本との出会いを求める声が4人からあった。また「お友だちと一緒に聞いて、自分とはちがう感じ方もあるんだなと感じて欲しい。また共感もして欲しい。」というように、友だちがいるからこそできる絵本体験を要望する母親も4人いた。さらに「かんたんな絵本の登場人物・動物などになって劇遊びごっこなどを子供達でできれば楽しいと思う。」といった友だちとの遊びへの展開も4人から要望があった。

これらの結果から、母親は、家庭ではなかなかできない、園ならではの絵本体験を期待していることがわかる。子どもと絵本との出会いだけではなく、絵本を介した友だちとの交流・遊びについても要望がある点に留意したい。

Table 3 園での絵本のかかわりに対する要望 (人)

紙芝居など (家庭で見せる機会の少ないもの)	5
いろいろな (種類) の絵本	4
友だちとの共感	4
ごっこ・遊びへの展開	3
その他 (新しい本・素話・昔話・いろいろな読み手)	4

注) N=19人。ただし、異なる内容を2つ記述した人が1人いたため、合計で20人となっている。

⑥母親の読書行動 (a) 好意度 (Figure 8) : 「好きでも嫌いでもない」が最も多く16人 (40.0%)、次いで「好き」が14人 (35.0%) だった。子どもの絵本好意度の高さと対照的である。「とても好き」「好き」を併せると21人 (52.2%)、「好きでも嫌いでもない」「あまり好きではない」を併せると19人 (47.8%) となり、母親の読書好意度は2分される。

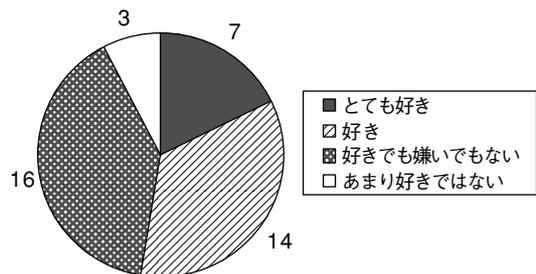


Figure 8 母親の読書好意度

(b) 頻度: 「あまり読まない」が最も多く21人 (52.2%) だった。次いで、「わりと読む」が9人 (22.5%)、「まったく読まない」5人 (12.5%)、「とてもよく読む」

3人(7.5%)、「よく読む」2人(5.0%)であった。「あまり・まったく読まない」が26人(65.0%)と6割を超える。母親の読書活動は全般的に活発ではないことが伺える。

⑦まとめ 本研究の対象となる4歳児の家庭での絵本体験の特徴は、以下のようにまとめられる。

乳児期から絵本と出会い、週に2, 3回以上は、自分から頼んだり、習慣として就寝前に布団に入って、主に母親から絵本を読んでもらっている。

絵本がとても好きな子どもが多く、30冊以上の絵本に囲まれて、幼稚園から月決めて持ち帰る絵本や、シリーズ絵本を好んで読んでいる。

母親は、絵本の文章を大切にしながら、声を変えたり、会話をしながら、工夫して絵本を読んでいる。子どもの方は、そうした母親の読みをじっと静かに聞いて、絵本の筋の展開を楽しみながら、質問をしたり、感想を言ったりなど、言語的に活発に場面に参加している。

子どもがひとりで絵本を見る頻度には個人差が大きいが、見る時間は大体1日15分程度である。

入園・進級後、園での絵本体験についての会話はあまるものの、家庭での絵本体験はあまり変化していないと母親は認識している。また、幼稚園には、家庭ではできない園ならではの多様な絵本、あるいは物語体験を期待している。

母親の読書好意度は高くはなく、好きな人とそうでない人に2分された。読書の頻度も高くはなかった。

以上、全体的な特徴をまとめた。以下では、要因ごとの分析結果をみていく。なお群差の分析では、差が見られた項目のみを記す。

### 2. 3. 2. 絵本の好意度による比較

「とても好き」24人、「好き」15人、「好きでも嫌いでもない」1人であったため、「とても好き」と「好き」の2群(計39人)に分け、比較を行った。

①読み聞かせ行動 T検定の結果、「頻度」において有意差が見られ、「とても好き」の方が平均値が高かった( $t(37)=2.30, p<.05$ )。

②絵本 「絵本の種類」で差が見られた。「とても好き」の方が「アニメ絵本」( $\chi^2(1)=4.60, p<.05$ )を読む人が多く、「しつけ絵本」( $\chi^2(1)=3.59, p<.10$ )も多い傾向にあった。

①②の結果から、「とても好き」と母親が子どもの好意度をより高く認識している群の方が、頻繁に、かつアニメやしつけも含めた多様な種類の絵本に接していることがわかる。

③読み聞かせ中の反応 (a) 母親の読み方: 「とても好き」の方が「会話をしながら」( $t(37)=2.03, p<.05$ )、「子どもに読ませる」( $t(37)=2.03, p\leq.05$ )が有意に多かった。子どもの言語的参加を促す読み方が多いといえる。「生活経験との関連づけ」も「とても好き」の

方が多い傾向にあった( $t(37)=1.96, p<.10$ )。

(b) 子どもの反応: 「言葉の繰り返し」( $t(37)=2.16, p<.05$ )、「同じ身振り」( $t(37)=2.23, p<.05$ )、「関連話す」( $t(37)=2.61, p<.05$ )、「先取り」( $t(37)=2.07, p<.05$ )の4項目で「とても好き」の方が多かった。子どもが言語的にも非言語的にも活発に読み聞かせに参加していることがわかる。逆に「非集中」( $t(17.02)=-1.88, p<.10$ )と「同じページ」( $t(37)=-1.81, p<.10$ )の2項目は「好き」の方が多い傾向にあった。

以上の結果より、母親が「好き」とより好意度を低く認識している群の子どもの方が、1冊の絵本を読み終えるまで集中が続かず、話の筋の展開を楽しむよりも、お気に入りのページをじっくり見たがる傾向にあることが指摘される。

④ひとり読み 「とても好き」の方が「時間」が長かった( $t(37)=2.05, p<.05$ )。

⑤入園・進級後の変化 (Figure 9) 「とても好き」の方が「増加」が多かった( $\chi^2(2)=10.38, p<.01$ )。

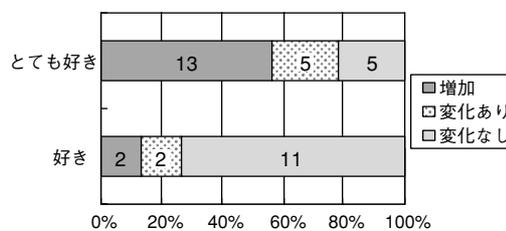


Figure 9 絵本の好意度と絵本の種類の変化

### 2. 3. 3. 読み聞かせ頻度による比較

高: 19人(47.5%) (「毎日」11人、「ほぼ毎日」8人)、中: 12人(30.0%) (「週2,3回」12人)、低: 9人(22.5%) (「週1回」5人、「したことはある」4人)の3群に分け、比較を行った。

①読み聞かせ行動 1 要因分散分析の結果、「時間」( $F(2,37)=5.22, p\leq.01$ )で有意差が見られた。Tukey法による多重比較を行った結果、低群が中・高群よりも有意に短かった。「前日の読み聞かせ時間」( $F(2,34)=3.04, p\leq.10$ )にも差の傾向が見られ、多重比較の結果、低群よりも中群の方が長い傾向が見られた。

②絵本 「子どもの好意度」( $F(2,37)=5.80, p<.01$ )で有意差が見られた。Tukey法による多重比較を行った結果、中群よりも高群で評定が高かった。

③読み聞かせ中の反応 (a) 母親の読み方: 「何冊・何冊でも」( $F(2,37)=3.59, p<.05$ )で有意差が見られ、多重比較の結果、低群が中群よりも評定が低かった。

(b) 子どもの反応: 次の3項目で有意差が見られた。「静かに黙って」( $F(2,37)=3.25, p\leq.05$ )、「質問」( $F(2,37)=5.14, p<.05$ 、多重比較の結果:高>中=低)、「次のページ」(Leveneの検定の結果、等分散が成立しな

ったためKruskal-Wallisの検定を行った。 $\chi^2(2)=8.56, p<.05$ 。多重比較の結果、高<中=低)。また「感想」は高群の方が低群よりも多い傾向が見られた ( $F(2,37)=3.09, p<.10$ 、多重比較の結果:高>低)。

④入園／進級後の変化：「絵本の会話」が「ある」が、低群で少ない傾向にあった (低：4人44.4%，中：10人83.3%，高：16人84.2%， $\chi^2(2)=5.79, p<.10$ )。

### 2. 3. 4. 保育年数による比較

2年：24人 (男児14人・女児10人) と3年：16人 (男児9人・女児7人) の2群で、比較を行った。

③読み聞かせ中の反応 (a) 母親の読み方：2年保育の母親の方が「字を教える」 ( $t(37.9)=2.14, p<.05$ ) が多かった。

(b) 子どもの反応：「言葉の繰り返し」 ( $t(38)=1.72, p<.10$ )、「同じ絵本」 ( $t(38)=1.70, p<.10$ ) の2項目において、2年保育の方が評定値が高い傾向にあった。

⑤入園・進級後の変化 「絵本の会話」は、2年保育の方が「ある」が多かった ( $\chi^2(1)=5.00, p<.05$ )。「量」と「種類」は、統計的には有意差は見られなかった。しかしFigure 10と11に示したように、2年保育の方が量・種類とも増加している傾向が見られた。

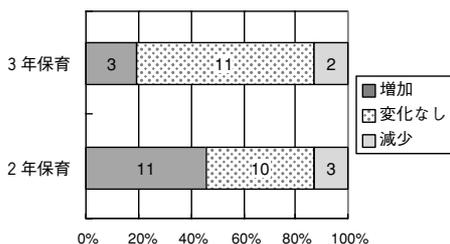


Figure 10 保育年数と読み聞かせの量の変化

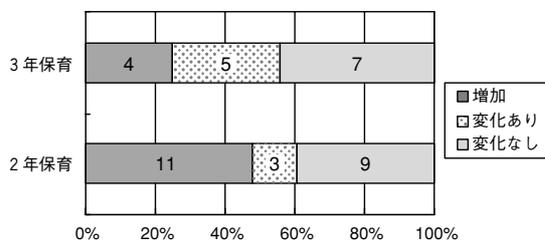


Figure 11 保育年数と絵本の種類の変化

### 2. 3. 5. 母親の読書行動による比較

(1) 好意度 高：21人 (「とても好き」7人・「好き」14人)、低：19人 (47.8%) (「好きでも嫌いでもない」16人・「あまり好きではない」3人) の2群に分けた。

②絵本 「子どもの絵本好意度」 ( $t(32.7)=2.36, p<.05$ ) に有意差が見られ、高群の方が高かった。

③読み聞かせ中の行動 (a) 母親の読み方が群によって異なり、高群の方が「文字」 ( $t(27.0)=-2.46, p<.05$ )

や「物の名前」 ( $t(38)=-2.25, p<.05$ ) を教えることが少なく、「内容確認」も少なかった ( $t(38)=-3.33, p<.01$ )。学習を促すような働きかけが少ないといえる。

(2) 頻度 高：14人 (35.0%) (「とてもよく読む」3人・「よく読む」2人・「わりと読む」9人)、低：26人 (65.0%) (「まったく読まない」5人・「あまり読まない」21人) の2群による比較を行った。

①読み聞かせ行動 有意差が見られたのは、「読み聞かせの開始時期」 ( $t(38)=-2.33, p<.05$ ) と「読み聞かせ頻度」 ( $t(38)=2.45, p<.05$ ) だった。高群の方が、開始時期が早く、頻度も高かった。

②絵本 「好意度」 ( $t(36.9)=2.91, p<.01$ ) で有意差が見られ、高群の方が評定値が高かった。

③読み聞かせ中の行動 (b) 子どもの反応が群によって異なった。高群の方が「絵本に関連することを話す」 ( $t(37.9)=2.99, p<.01$ )、「寝てしまう」 ( $t(38)=2.73, p<.01$ ) が多く、「非集中」 ( $t(37.4)=-2.23, p<.05$ ) が少なかった。

### 2. 3. 6. 比較のまとめ

子どもの好意度の比較から、母親が子どもが絵本が「とても好き」だと捉えている家庭では、絵本と接する機会が多く、読み聞かせ中の言語的やりとりなど、絵本にかかわる活動が全般的に活発であることが明らかになった。

読み聞かせの頻度の比較では、頻度が低い家庭の方が、絵本に関連する活動が全般的に不活発であった。

保育年数の比較からは、4歳新入園児の方が幼稚園という新しい環境の影響が大きいため、絵本に関連する活動が増大する傾向が見られた。

母親の読書行動による比較では、母親の読書行動が活発なほど、子どもは早期から絵本に頻繁に接し、絵本に対する好意度も高かった。

## 3. 研究2：3歳時と4歳時の比較

### 3. 1. 目的

幼稚園3歳新入園児の3歳から4歳にかけての家庭での絵本体験がどのように変化するのか、園での絵本体験の影響を加味しながら明らかにする。

### 3. 2. 方法

#### 3. 2. 1. 調査協力者と手続き

2004年度にN県内N幼稚園の3年保育に入園した幼児の母親24人 (子どもの性別、男女各12人)。この内、3歳時と4歳時の7月に実施した2回の質問紙調査の両方に回答した15人 (男8人・女7人) が本研究の対象である (本研究の協力者は、研究1の協力者に含まれる)。4歳時点での母親の平均年齢は、35.9 (SD3.32、レンジ33~43)。調査時期は、3歳、4歳時とも7月中旬である。

### 3. 2. 2. 質問紙の構成

研究1と同じ。ただし本研究では、子どもの絵本体験に焦点をあてるため、母親の読書行動は分析から除外した。

### 3. 2. 3. 分析

質問紙の各項目において、評定値が増減した人数を分析すると同時に、平均値が求められる項目は、対応のあるT検定によって差の検定を行った。

### 3. 3. 結果と考察

年齢差が見られた項目のみを以下に示す。

①読み聞かせ行動 「読み聞かせ頻度」は増加も3人いたが、5人が減少していた。「時間」も増加が2人いたが、3人が減少していた。さらに「前日の読み聞かせ時間」を見ると、3歳の平均は22.3分 (SD14.4) であるのに対し、4歳は12.3分 (SD14.6) だった。対応のあるT検定の結果、有意に4歳の方が短かった ( $t(14) = -3.16, p < .01$ )。この時期、絵本に対する好意度は高く、変化はほとんど見られないが、実際に絵本とかかわる時間量は減少している。

「読み手」を見ると、どちらの年齢も母親が主な読み手であったが、母親以外の主な読み手は、3歳の祖母2人に対し、4歳では祖母3人、父1人、兄1人とやや増えていた。下にきょうだいが生まれたり、逆に年長のきょうだいが成長したりといった家族の中の変化がこの結果に反映されているのだろう。

「時間帯」(Figure 12) は、3、4歳とも「就寝前」が最も多いが、4歳になると読む時間帯のばらつきが小さくなり、特定の時間帯に集約されている。

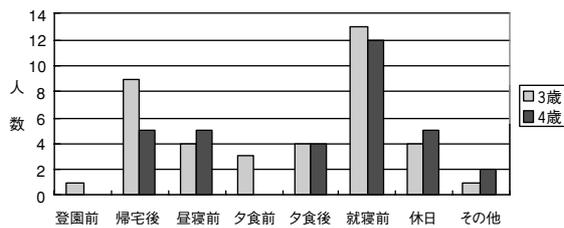


Figure 12 絵本を子どもと一緒に読む時間帯

②絵本 3歳と4歳で「好意度」の変化が見られたのは4人で、増加、減少が2人ずつだった。7割以上(11人)は、変化がなかったことになる。いずれの年齢においても「とても好き」10人、「好き」5人であり、全体的に絵本に対する好意度は高い。

「絵本数」(Figure 13) は、4歳の方が冊数が多い家庭が増えていた。評定の平均値の検定でも有意に4歳で多くなっていた ( $t(14) = 2.86, p < .05$ )。入園後1年間で、毎月絵本を幼稚園から持ち帰ることもあり、子どもの絵本が増加していることがわかる。

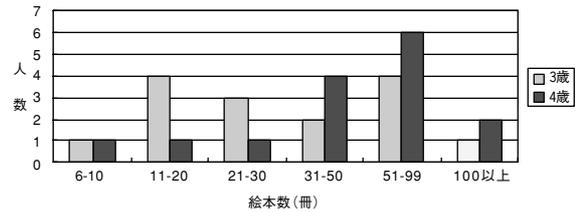


Figure 13 絵本数

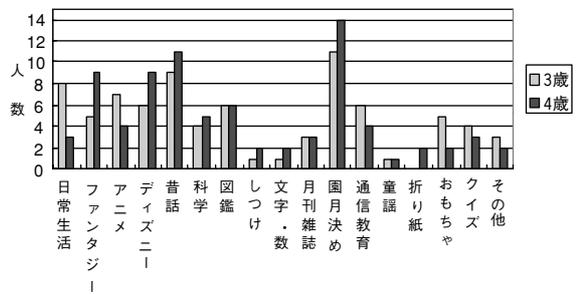


Figure 14 絵本の種類

「絵本の種類」(Figure 14) は、3、4歳とも最も多いのは、園で毎月購入している月刊絵本である。4歳になるとほぼ全員が家庭で読んでいる。また「日常生活」を描いた絵本が4歳では顕著に減少している。その他、「おもちゃのような絵本」や「アニメ絵本」が減少し、「空想的なファンタジー絵本」が4歳で増えている。子どもの発達や絵本経験を積み重ねる中で、アニメのキャラクターやしかけ・音などに頼った絵本でなくても、現実から離れた空想世界を楽しめるようになってきていることが伺える。

「入手方法」には、年齢による差は見られず、幼稚園の「『絵本の部屋』で借りる」がいずれの年齢でも最も多かった(3歳15人, 4歳14人)。次いで「月決めで幼稚園から」(3歳12人, 4歳13人)が多かった。「親が買う」(3歳11人, 4歳10人)よりも園を通して絵本を入手する人が多いことがわかる。

③読み聞かせ中の反応 (a) 母親の読み方: 対応のあるT検定の結果、「読めるところは、子どもに読ませながら読んでいる」が4歳児に多い傾向が見られた ( $t(14) = -2.09, p < .10$ )。

(b) 子どもの反応: 「読み終わる前に次のページをめくろうとする」が3歳児に多い傾向が見られた ( $t(14) = 2.00, p < .10$ )。

(c) 子どもの絵本の楽しみ方: 結果をFigure 15に示した。4歳児になると「お話の筋の展開」に子どもの楽しみ方が集約されていることがわかる。

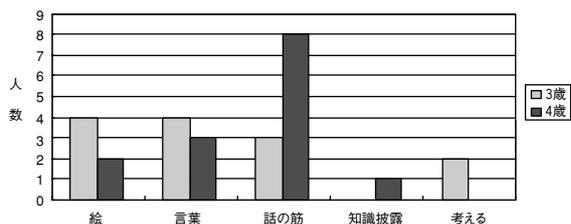


Figure 15 子どもの絵本の楽しみ方

以上、読み聞かせ中の反応の結果から、3歳から4歳にかけて、絵本の楽しみ方が物語の筋の展開を理解するに移行しつつあることが伺える。

④ひとり読み 「頻度」「時間」の変化には、ばらつきがみられた。ともに、4歳で減少が6人、増加が5人、変化なしが4人だった。

⑤入園／進級後の変化 (Table 4) 3歳に比べ、4歳では変化がないと捉える母親が多いことがわかる。

Table 4 入園／進級後の変化 (人)

		3歳	4歳
会話	ある	12	9
	ない	3	6
絵本を見る回数	増加	11	3
	変化なし	2	10
	減少	2	2
絵本の種類	増加	7	4
	変化した	4	4
	変化なし	3	7

⑥まとめ 3歳～4歳にかけての家庭での絵本体験の変化をみると、子どもの絵本の好意度に変化はないと捉える母親が多いが、実際に絵本とふれあう機会や時間量が減少していた。ただし園から毎月絵本を持ち帰ることもあり、所有する絵本の数が増えていた。持ち帰りの絵本は家庭でもよく読まれ、その他、現実から離れた空想世界を楽しむような種類の絵本が、物語の展開を楽しむことを中心に読まれていた。

子どもが1人で絵本を読む行動には、頻度、時間ともに個人差が大きかったが、読み聞かせ中の母親の読み方では、全体的に4歳になると読めるところは子どもにも読むよう、促す傾向が見られた。

進級の影響は、入園ほどは大きくなかった。

#### 4. 総合的考察

以上の結果をもとに、ここでは、4歳児の家庭での絵本体験の特徴をまとめ、幼稚園ならではの絵本の実践のあり方を提案していく。

##### 4. 1. 4歳児の家庭での絵本体験の特徴

要因別の分析から、4歳児の家庭での絵本体験の特徴として、子どもの絵本好意度が高いと母親が捉え、

読み聞かせ頻度も多い、そして母親の読書行動も活発な（読書好意度が高く、読書頻度が高い）家庭の方が、絵本と接する機会も多く、時間量も多いことが明らかになった。また、読み聞かせ中の子どもの言語参加も活発で、物語の展開を楽しむような絵本の見方をしていくことが明らかになった。保育年数の比較では、主に入園／進級後の変化に違いが見られ、4歳時点での変化は、3年保育児よりも4歳入園の2年保育児の方が大きかった。

3～4歳の年齢比較では、4歳になると絵本とふれあう機会と時間が減少し、母親も読み聞かせ中に読めるところは子どもが読むように促す傾向が見られた。絵本の楽しみ方は、日常生活を描いた内容から、空想世界の物語の展開を楽しむように変化していた。

##### 4. 2. 幼稚園の絵本体験の家庭への影響

幼稚園での絵本体験は、家庭で読む絵本に対する影響が大きかった。園から持ち帰る絵本が家庭で最もよく読まれる絵本であり、絵本の入手方法も、親が購入するよりも、園から月決めの絵本を持ち帰ったり、借りることの方が多くなっていた。園での絵本体験を家庭に帰って話す子どもも多かった。

それゆえ、保育のなかで子どもとどのような絵本を読むかといったことをはじめとして、家庭に手渡す月刊絵本の選書、園内文庫の整備や貸出方法の工夫などが、特に重要となってくるだろう。

##### 4. 3. 幼稚園ならではの絵本実践のあり方

母親からの園への要望の記述に見られたように、「家庭ではできない」絵本や物語体験がやはり必要となってくるだろう。多様な種類の絵本や、紙芝居、大型絵本、ペープサート、エプロンシアターなど、さまざまなメディアの利用が求められていた。園児1人ひとりの読書傾向を把握しながら、その時々の子育てに応じた物語体験を、利用するメディアにも留意しながら、幅広く提供していくことが要求される。

また、友だちがいるからこそ楽しめるといった視点から、絵本体験を捉えることも重要である。絵本は読み手と聞き手をつなぐだけでなく、聞き手同士を結びつけ、一体感を育むものでもある（横山,2003）。1人の子どもの興味をクラス全体に広げることも可能なのである。

家庭では、4歳になるとすでに「文字を読む」ことが要求され始めている。文字習得初期の子どもにとって、文字を読むことに集中すれば、物語の内容を理解することは難しくなる。それゆえ、逆に園では、4歳のこの時期、物語の内容をたっぷり楽しむために、保育者が子どもたちに絵本を読む活動を重視する必要があるだろう。

## 引用文献

- 秋田喜代美・黒木秀子（編） 2006 本を通して絆をつむぐ：児童期の暮らしを創る読書環境 北大路書房
- 秋田喜代美・無藤 隆 1996 幼児への読み聞かせに対する母親の考えと読書環境に関する行動の検討 教育心理学研究, **44**, 109-120.
- 文部省 1998 幼稚園教育要領 大蔵省印刷局
- 奈良市市役所広報報課 2006 子ども読書活動推進計画：未来に羽ばたくこどもたちのために 奈良しみんだより 平成18年（2006年）12月 pp.3-5.
- 横山真貴子 2003 保育における集団に対するシリーズ絵本の読み聞かせ：5歳児クラスでの『ねずみくんの絵本』の読み聞かせの事例からの分析 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, **12**, 21-30.
- 横山真貴子 2006 3歳児の幼稚園における絵本とのかかわりと家庭での絵本体験との関連：入園直後の1学期間の絵本とのかかわりの分析から 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, **15**, 91-99.

## 付 記

- (1) 研究にご協力いただきました保護者の方々に心よりお礼申し上げます。
- (2) 本研究の実施においては、平成15～17年度科学研究費補助金（若手研究（B））（課題番号15730298）の補助を受けた。